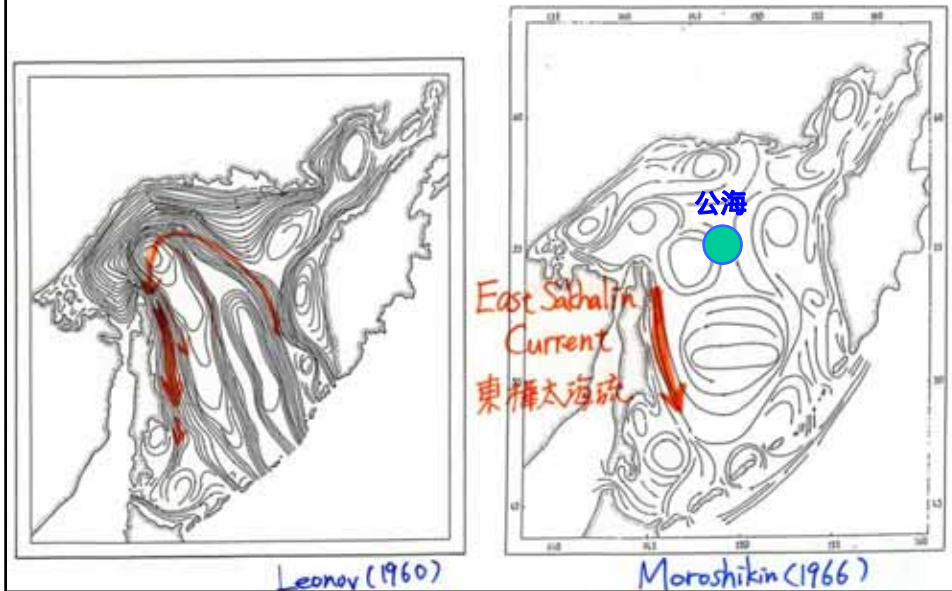


オホーツク海の海流はよくわかっていなかった。
冷戦終結で観測が可能になった。

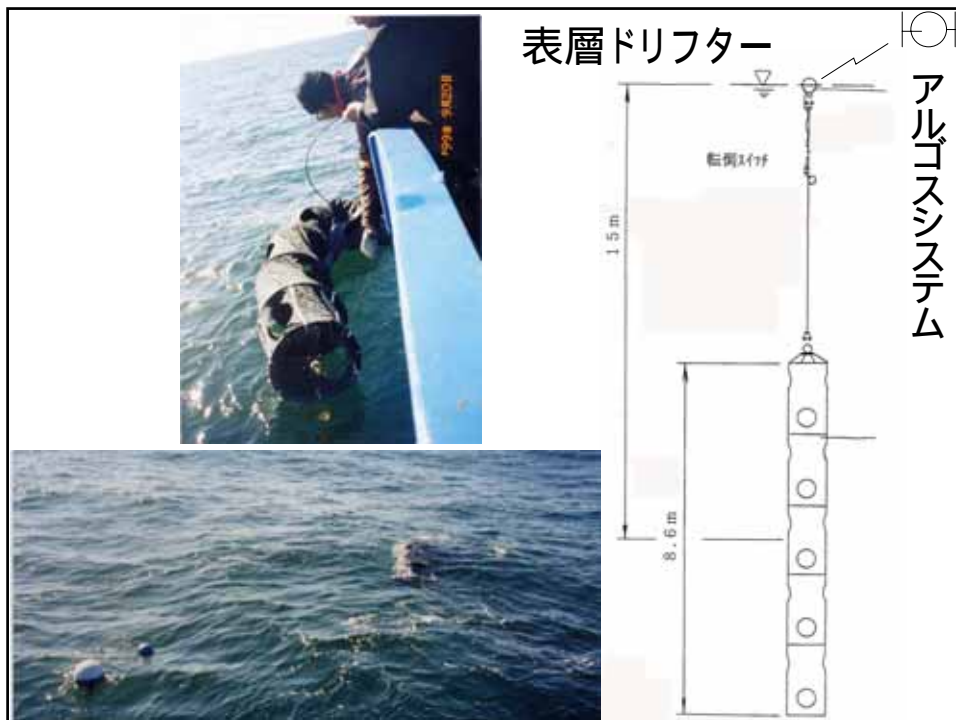
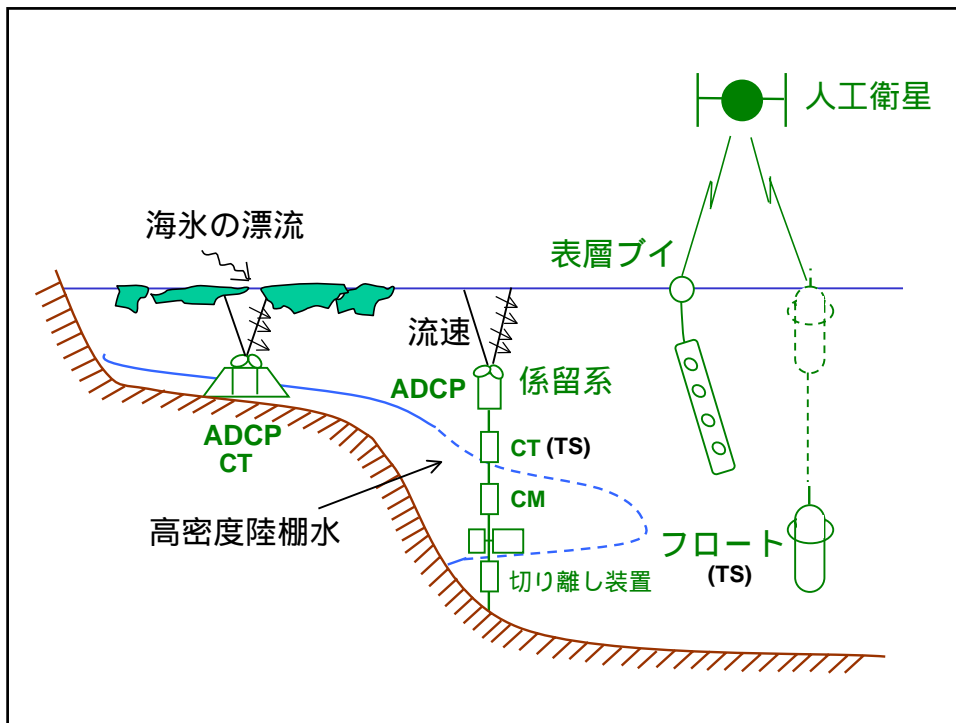


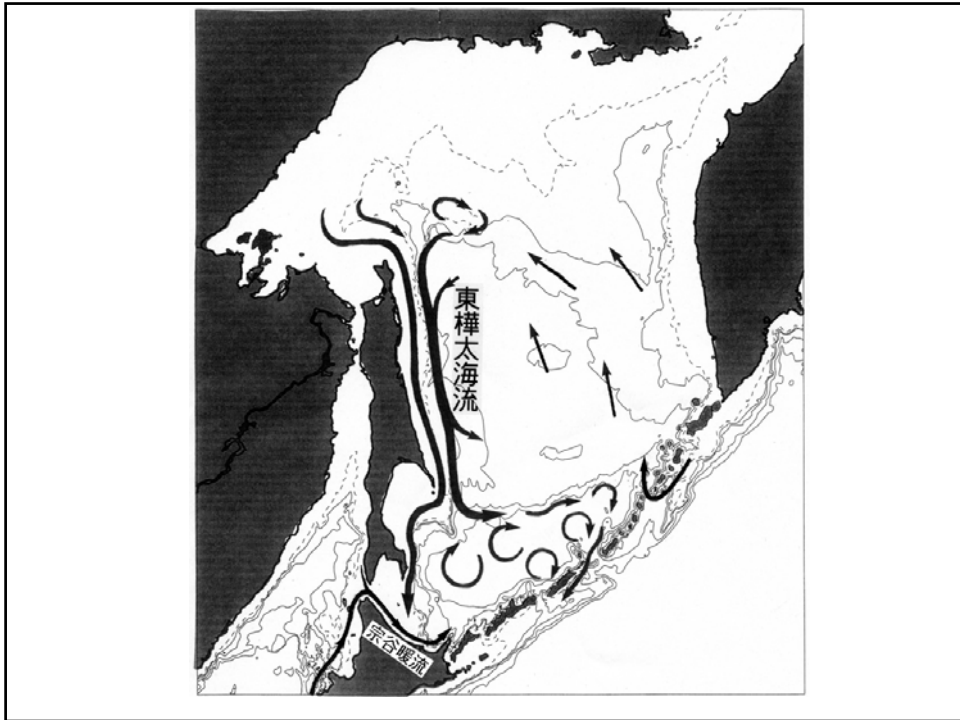
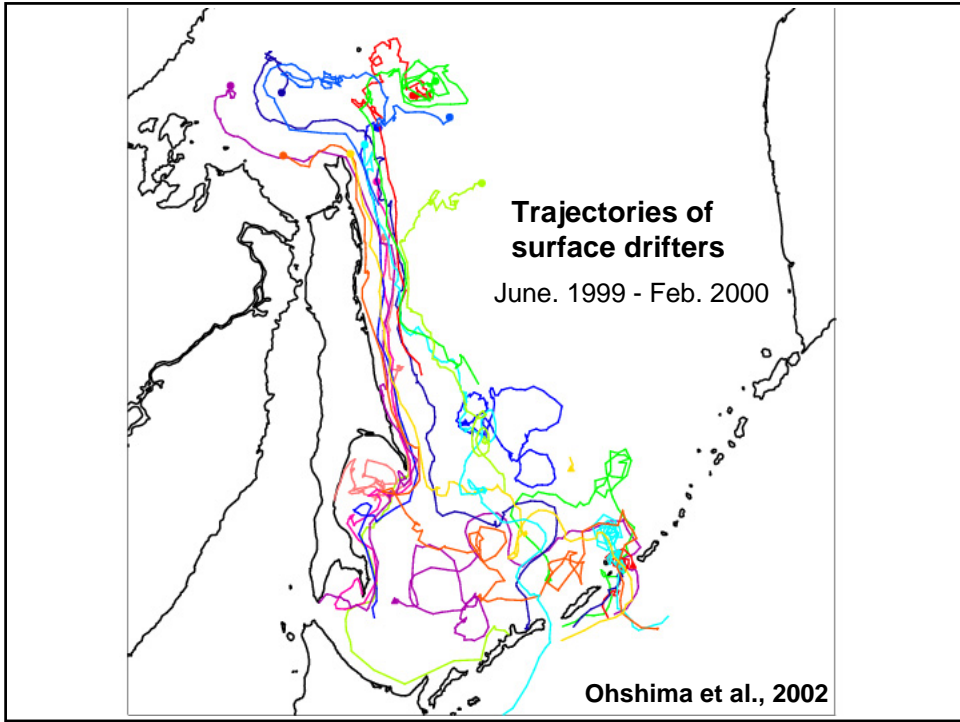
JOINT JAPANESE-RUSSIAN-U.S. STUDY
OF THE SEA OF OKHOTSK

Preliminary Report on the First Expedition, July-August 1998 (XP98)

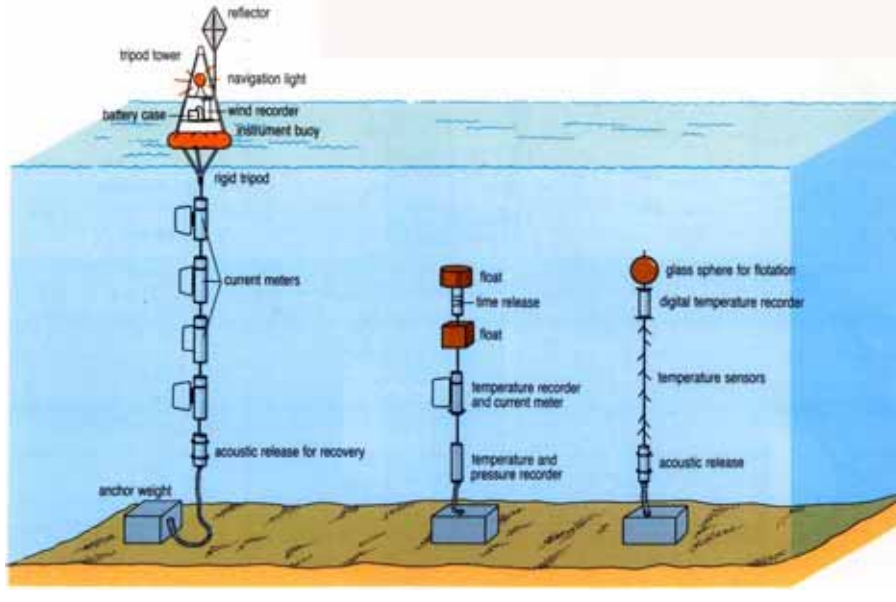
1998年7・8月
1999年8・9月
2000年6・7月
2001年8・9月







係留系システム

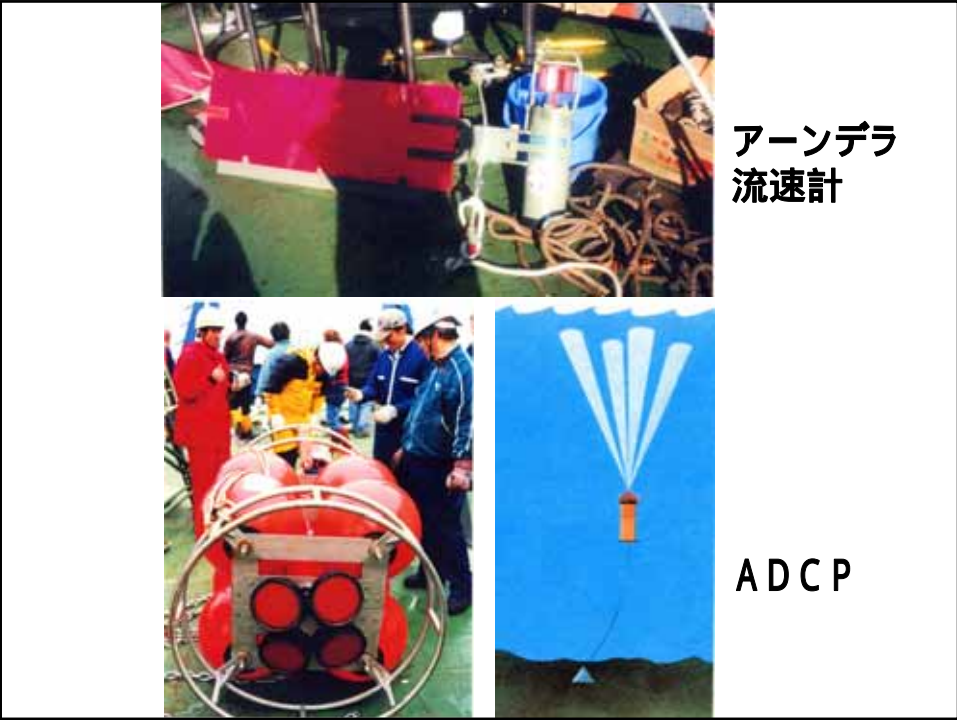


水中切り離し装置



アーンデラ流速計

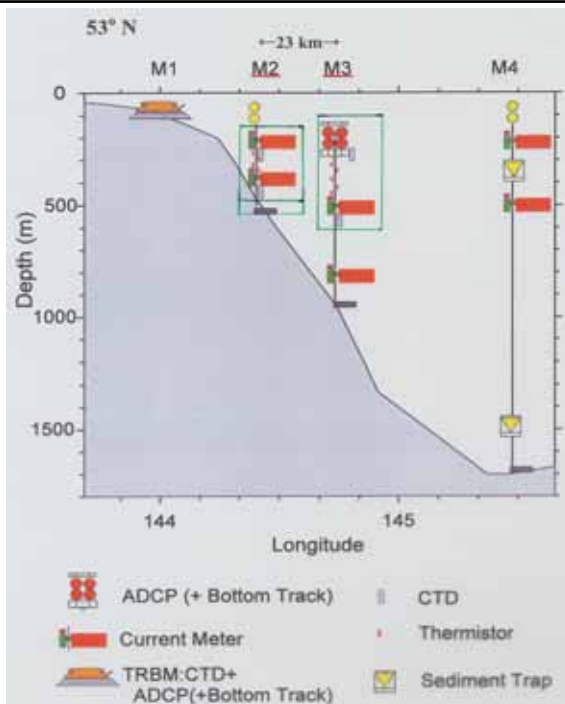
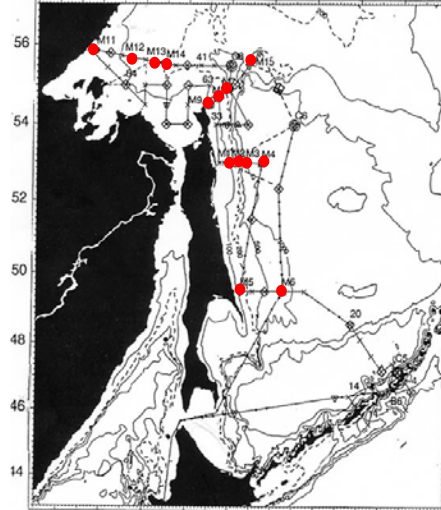




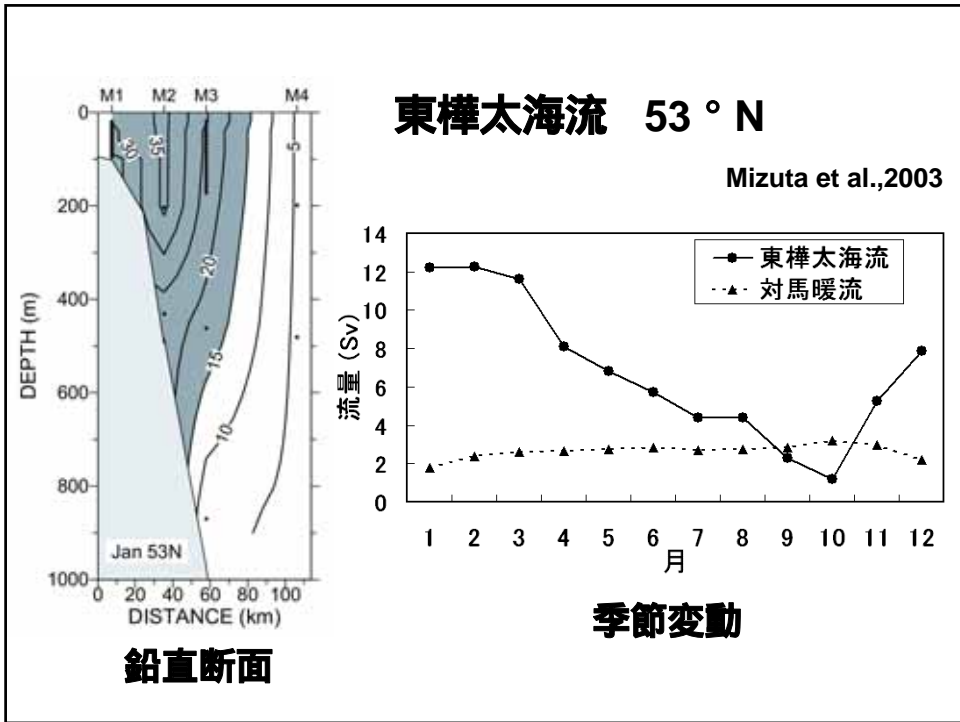
Joint Japanese-Russian-U.S. Study of the Okhotsk Sea

Four R/V Khromov cruises
 1998(Jul-Aug)
 1999(Aug-Sep)
 2000(Jun-Jul)
 2001(Aug-Sep)

Hokkaido University (Wakatsuchi)
 JAMSTEC (Takizawa)
 FERHRI (Volkov)
 UW (Riser)
 Scripps (Talley, Rudnick)



樺太東岸沖で展開された
係留系アレイの例



北海道新聞平成14年10月12日

流量「対馬」の3倍 夏冬で激しく増減

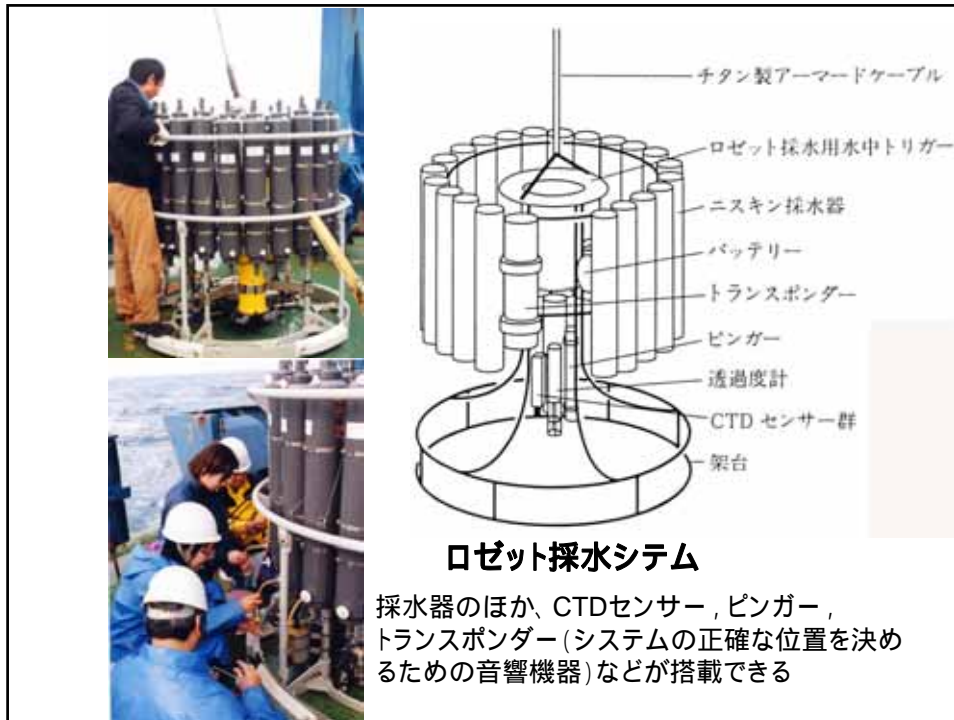
日米口の共同研究で明らかになった東樺太海流の流れ (北大低温科学研究所発表)

「幻の海流」として実態がほとんど分かっていなかったが、「東樺太海流」の研究は北大低温科学研究所の若土正博所長(教授、極域海洋学)を主として、今年十月まで行われた。その結果、東樺太海流はサハリン中部の北緯五十三度付近で、一秒間当たり七百立方メートル、一日で五百二十立方メートルに達した。一四・四立方メートルの平均流量があった。北半球で最大流量の海流(平均流量三百立方メートル)には及ばないが日本海を北上して樺太、親潮の南縁を流す。

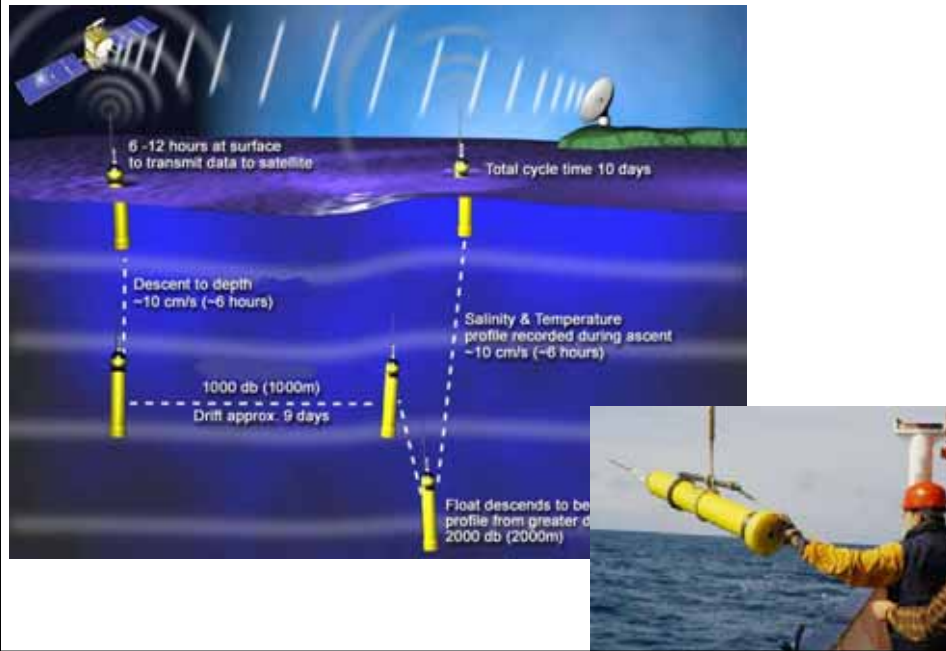
人工衛星(ハルビン)で観測した東樺太海流の流量は、二四万一千三百立方メートルに達した。これは、東樺太海流の流量(一日で五百二十立方メートル)の約四十五倍に達した。これは、東樺太海流の流量(一日で五百二十立方メートル)の約四十五倍に達した。これは、東樺太海流の流量(一日で五百二十立方メートル)の約四十五倍に達した。

「幻の東樺太海流」解明

日米口研究

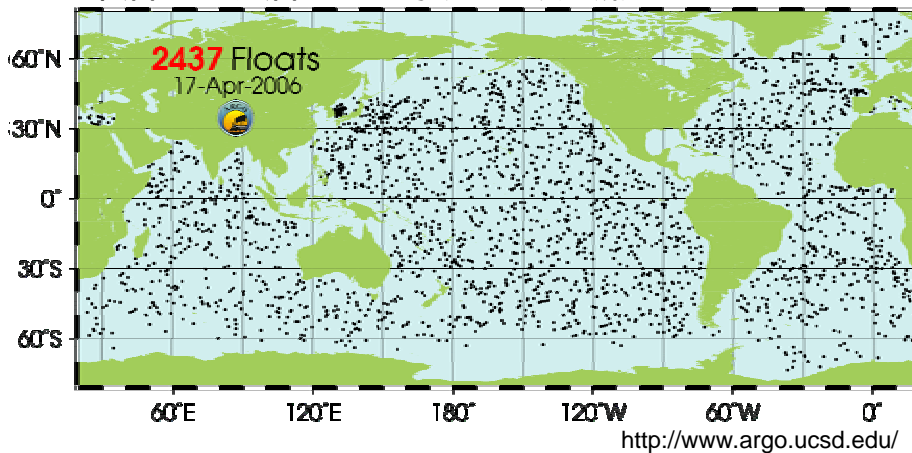


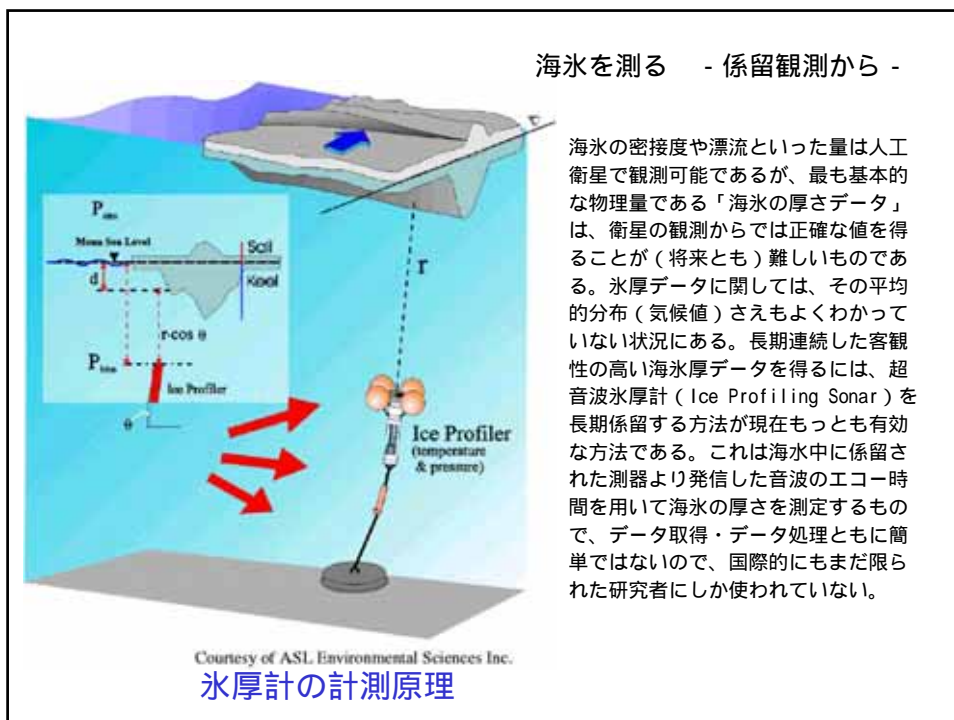
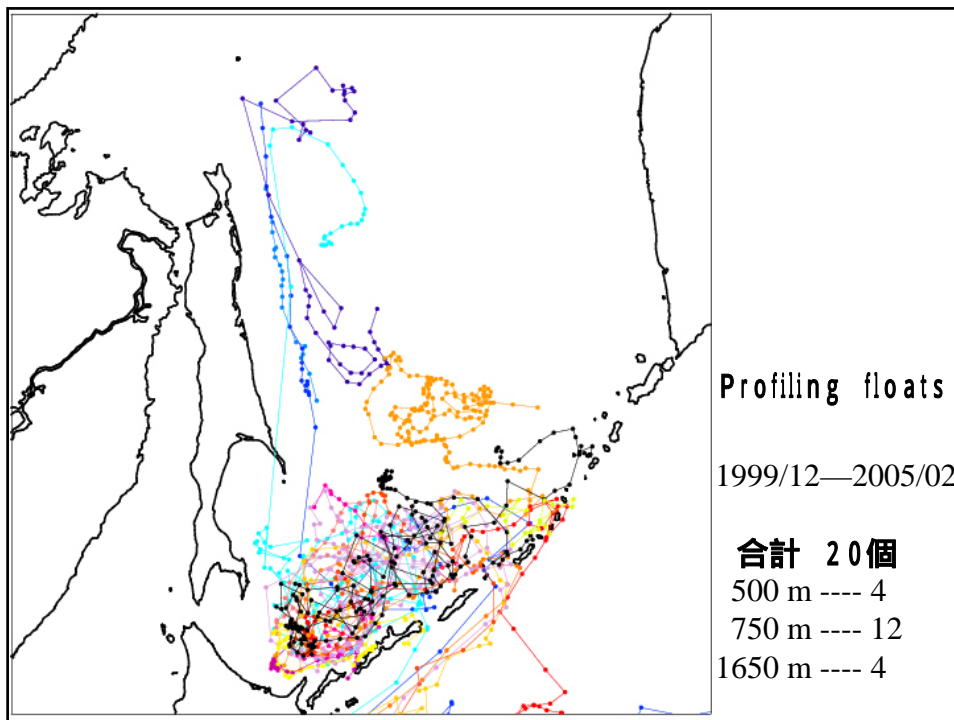
プロファイリングフロート：ARGO

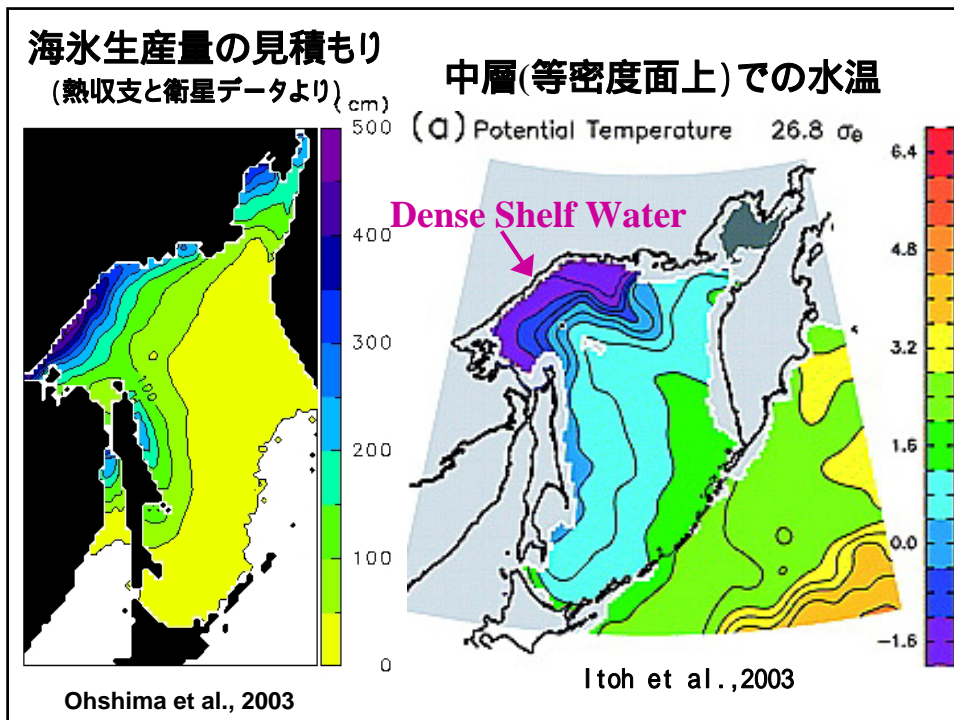
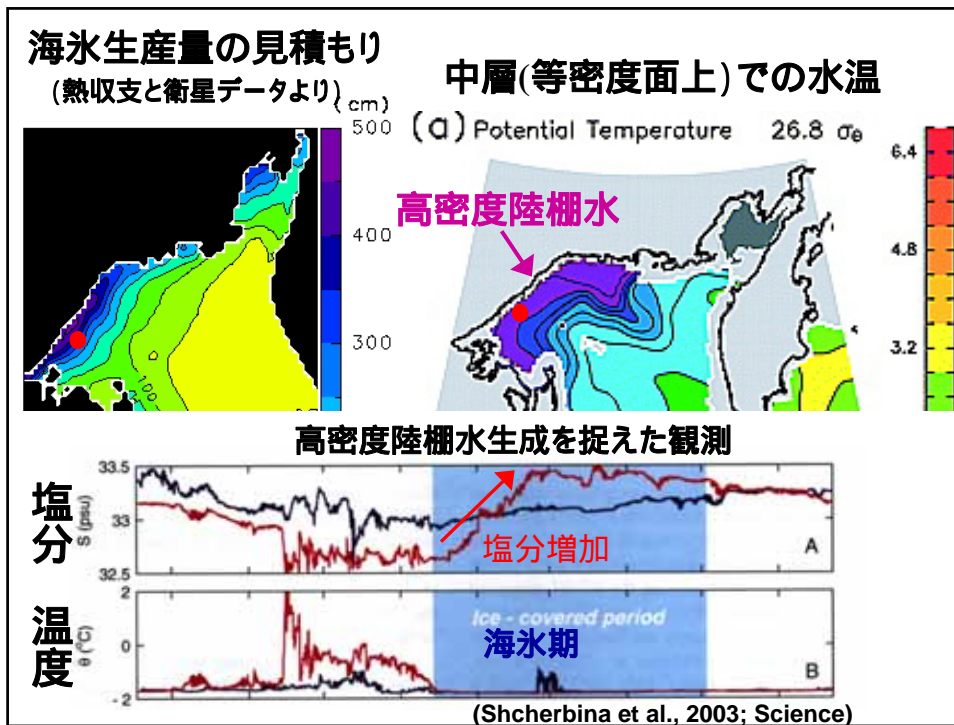


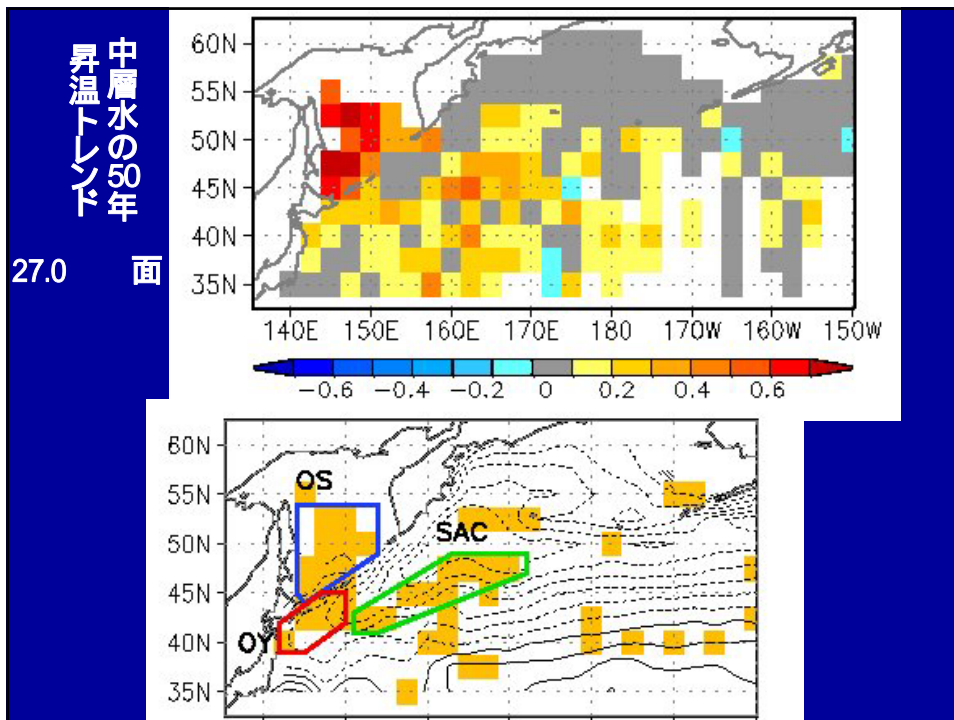
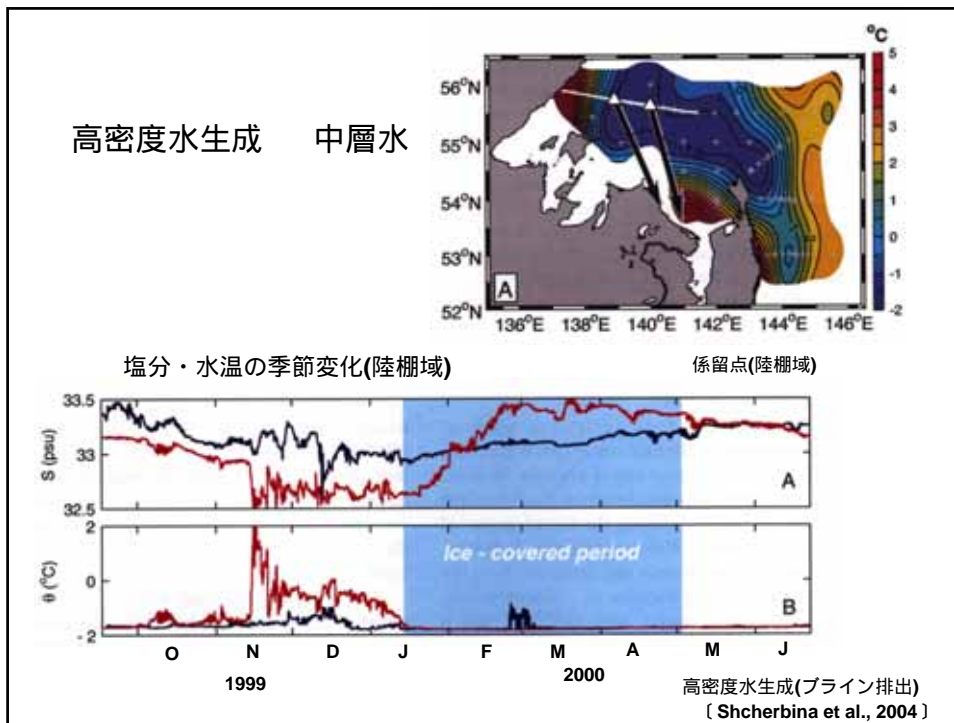
ARGO(アルゴ)計画(2000年～)

プロファイリングフロートを全世界に約3000個投下し、
中層から表層までの水温・塩分・流れをリアルタイム









**JSTサイエンスチャンネル番組：
サイエンスフロンティア21
「オホーツクに迫る-海氷と豊かな海の秘密-」**

**第47回科学技術映像祭 文部科学大臣賞受賞
(ポピュラー サイエンス部門)**

**World Media Festival-global competition
for modern media 2006
Gold medal (Documentaries : Geography)**